

## 「夢追い人通信」 第 30 号 「バルト 3 国・ポーランド 10 日間旅日記」 (2017.7.18~27)

日本と欧州を最短距離で結ぶ、緑あふれる**フィンランド・ヘルシンキ**へお気に入りのフィンランド航空で到着。ここからシリアラインのフェリーで、**エストニア**の**タリン**に着く。今夏の旅は、バルト3国(**エストニア・ラトヴィア・リトアニア**)と**ポーランド**だ。

いずれも初めて訪れる国々で、バルト3国は、近年になって、ソヴィエト連邦から独立したこと、ポーランドは、周辺国に国を蹂躪されながらも、蘇った、作曲家ショパン、映画のワイダ監督とかキュリー夫人に代表される、芸術と学問に秀でた国民性ぐらいしか知識がなかった。



第30号の内容は次のとおり。

### 日 程

- 第1日目 東京(成田) ✈ **フィンランド・ヘルシンキ** ➡ **エストニア・タリン**  
第2日目 エストニア・タリン ➡ **ラトヴィア・リガ**  
第3日目 リガ ➡ バウスカ ➡ **リトアニア・カウナス**  
第4日目 カウナス ➡ ヴィリニウス ➡ カウナス  
第5日目 カウナス ➡ **ポーランド・ワルシャワ**  
第6日目 ワルシャワ ➡ クラクフ  
第7日目 クラクフ ➡ ヴィエリチカ ➡ オシフィエンチム ➡ クラクフ  
第8日目 クラクフ ➡ チェンストホーヴァ ➡ ワルシャワ  
第9日目 ワルシャワ ✈ **フィンランド・ヘルシンキ**  
第10日目 ヘルシンキ ✈ 東京(成田)



### 行 程

第1日目【 7月 18 日(火) 東京(成田) ✈ ヘルシンキ ➡ タリン 】 ☀ 10,178 歩 空路 10 時間 20 分 海路 3 時間 30 分

成田から、欧州に一番近い、フィンランド航空でヘルシンキ着。着陸間際に緑が見える。到着後、港に向かう。ここからシリアラインのフェリーで、バルト海を渡りエストニアのタリンを目指す。結構大きな船だ。夕方の行程なので、客室はなく、皆



思い思いの場所を移動する。

我々夫婦は、最上階のデッキにあがる。風は強いが、海が見えて気持ちがいい。風よけの透明フードのあるところに腰をおろし、船内で買った夕食のサンドイッチを食べる。流れる雲と水面にうつる陽の光をみてると飽きない。





そのうち、家族連れが何人も上がってきて、子どもたちが、船橋の手すりを利用して遊び始める。どの子もこうしたところが好きだ。そろそろ風も冷たくなってきて、船内に戻る。長い船旅を慰めるためか、ヴァイオリン弾きや、バンド付きの歌もある。タリン着。夜の10時だ。白夜の時期とは言え流石にあたりは暗くなって、ホテルに到着。長い一日だった。

エストニア・タリン泊

第2日目【7月19(水) エストニア・タリン⇒ラトビア・リガ】● 8,135 歩 専用バス(以下バスと略)

朝食後、[世界遺産](#)のタリン市内観光。『歌の原』では、広々とした草地が広がり、ここで野外コンサートが開かれる。『トームベア城』は、代々の支配者の住まいとなった城で、南にある塔は「のっぽのヘルマン」と呼ばれ、国のシンボル。その後、旧市街を歩い



てまわる。街を歩いていると、人々や飾りなど興味が尽きない。

『アレキサンドル・ネフスキー大聖堂』は、エストニアを支配していた帝政ロシアが建てたロシア正教会。



旧市街の中心のラエコヤ広場にゴシック様式の『旧市庁舎』が立つ。ここにある塔は高さ 56m で登れるという。高所恐怖症だが、同じツアーのおばさんたちに励まされて、急な螺旋状の石段を手すりにつかまりながら勢いで登ってしまった。てっぺんは流石に見晴らしが良い。





昼食を、地元ビールと共にとり、バスに乗り、途中国境を越え**ラトヴィア**のリガを目指す。

夏空の下、田園風景が続く。

ラトヴィア・リガ泊

### 第3日目 【7月20日(木) ラトヴィア・リガ⇒バウスカ⇒リトアニア・カウナス】

☀ 歩数計故障 バス

バス出発が遅いので、朝食ビッフェを終えた後、ホテル近くの公園を散策。所々に咲いている花々がきれい。川が流れていて、水面に霧がかかっている。周りの気温が川の気温より低いので、霧が発生したもの。最初、温泉かなと思った。

今日は**世界遺産**リガ市内の観光だ。『大聖堂』、『聖ペテロ教会』、『リガ



城』、『三人兄弟』（仲良く並ぶ中世の家）等を歩いて見学する。

13世紀にハンザ同盟に加盟し、商業で栄えた時代の建物が旧市街に残っている。新市街には、「ユーゲント・シュティール様式（アー・ヌーヴォー）」の独創的な建物が並んでいて、こんなところで、素敵な彫像のファ

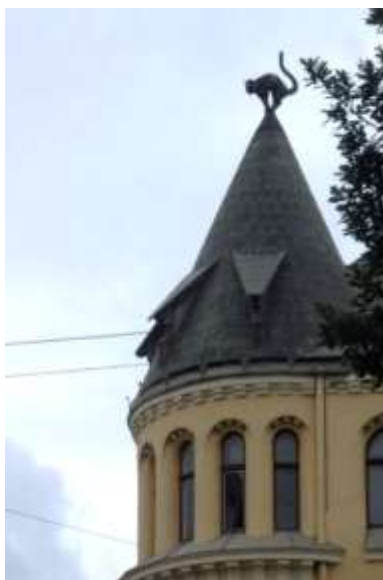


ザードにお目にかかれるとは思っても見なかった。





街角で楽器を演奏している白人とロマの女性の姿が気になった。



『猫の家』裕福なラトビア商人が大ギルトへの入会を断られ、自宅の屋根に、大ギルト会館に、尻尾に向けた猫を設置したという。

チキン料理の昼食をとり、バスに乗ってパウスカに向かう。



1時間40分の距離。バスを降りて、涼しい並木道を歩いて、『ルンダーレ宮殿』に着く。フランスのベルサイユ宮殿を想起させるバロック様式の宮殿、内部装飾はロココ調で







美しい。これでもかと続く、豪華な装飾を見て歩くのに疲れ、外にでると、バラのきれいな庭園が広がっている。天気が良くて気温も高い。噴水で女の子が遊んでいる。帰りの木陰の道をたどりバスに戻った。



ここからバスでカウナスへ。**ラトヴィア**と**リトアニア**の国境を越える約4時間の行程。

途中、『十字架の丘』に立ち寄った。見晴らしの良い丘に、十字架が林立している。十九世紀のロシア人に対する

反乱の犠牲者を追悼するため十字架を立てたのが始まりで、その後、処刑や流刑された人たちのために十字架が加わっていっ



た。丘を登ると磔刑のキリスト像やマリア像もある。ソ連からの独立を勝ち取ったバルトの人々の「平和を希求する」気持ち、この丘に凝縮されているのを感じた。

カウナス泊(連泊①)

第4日目【7月21日(金) カウナス⇒ヴィリニウス⇒カウナス】 🌞 歩数？ バス

日本経由のビザ発行でナチスドイツの迫害から6,000人ものユダヤ人を救った日本人外交官、杉原千畝氏が勤務していた『杉原記念館』(旧日本領事館)を訪れた。ここでの日本語ガイドは地元の青年だっ



た。大阪で暮らしたことがあり、時に関西弁が入る。見上げる長身のストールを首に巻いたイケメン。女性陣から大モテだった。私が「何かスポーツやっているの」と慣れない英語(何も英語で聞かなくてもよいのに)で尋ねると、「バスケットをしていた」と日本語が返ってきた。この国では、バスケットが盛んで、アメリカのプロチームで活躍している選手も多い。



記念館を出て、『アレクソタス展望台』に上がる。ここから、カウナスの旧市街を一望することができる。



添乗員さんに日本語通訳の青年とのスリーショットを撮ってもらう。眼下のナムネス川の河岸に書いてあるのは、国名「リトアニア」とバスケットボール。



『聖ペテロ&パウロ大聖堂』は、15世紀に建てられ、現在「リトアニア」のカトリックの司教座聖堂となっている。内部は、修復後間もないという、見事な 12 使徒の彫刻で飾られた祭壇が印象的だった。とにかく綺麗だった。





『カウナス城』は、13 世紀にドイツ騎士団の侵略を防ぐため造られた城。現在は、修復された塔と城壁の一部が残っている。

昼食場所近くのビルに、面白い絵がかかっていた。他のビルにもイラストが描かれていた。地元の画学生の作品らしいがユーモラス。



昼食後は、リトアニアの首都ヴィリニウスに向かう。周辺で結婚式が行われるらしく、正装の貴婦人と伊達男の姿が目に入る。金曜・土曜日は結婚式の日、各地で正装した男女の姿を目にした。



『聖アンナ教会』の創建は 14 世紀初頭で、16 世紀に現在の姿に改築。建物正面には、33 種類もの異なった形の赤レンガが使われ、透かし細工のようなゴシック独特の装飾。炎のような躍動感あふれる外観は、フランボワイアン（火焰式）ゴシック建築の傑作。



『聖ペテロ&パウロ教会』は、17世紀後半にバロック様式で建立されその後 30 年かけた内装が見ものの。

イタリアの彫刻家が制作した、数多くの漆喰彫刻が、天上や壁を覆っていた。彫刻のテーマは聖書や神話など。

ノアの方舟を天上から吊り下げた作品もあった。





リトアニアの首都ヴィリニウスでの地元ガイドは、日本語を話す中年の女性だ。彼女の説明では、ソ連からの独立機運が高まり、エストニアからリトアニアまで市民が手を繋いで3国を結んだ「人間の鎖」などの一連の運動もあって、ソ連は1991年に3国の独立を認めたという。「独立して変わりましたか」と尋ねると、「生活水準は、さほど変わらないが、精神的には、比較にならないほど自由で、独立して良かった」との答えが返ってきた。妻の依頼で彼女とのツーショットを撮る。もっといろいろ聞けば良かった。

カウナス泊(連泊②)

## < トピックス・「バルト3国母も脅威に備え」日経新聞 2017年8月15日夕刊記事 >

新聞に珍しく、バルト3国の記事が掲載されていた。記事によると、バルト3国での民間予備軍組織(パラミリタリー)の活動が盛んになっているという。隣国ロシアによるウクライナ侵攻を機に危機感が強まり、女性を含む志願者が膨らんでいる。背景には繰り返し隣国に侵攻され、大国の取引に翻弄されてきた苦難の歴史がある。エストニア南西部のパルヌ郡で行われたパラミリタリーの軍事競技会。国が侵略されたという想定で、行軍や射撃、ナイフ投げ、偵察能力も試される。女性も母も参加している。

## < まとめ:バルト3国 >

|    | エストニア                                                                               | ラトヴィア                                                                                | リトアニア                                                                                 |
|----|-------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 面積 | 4.5 万km <sup>2</sup> (日本の 1/9)                                                      | 6.5km <sup>2</sup> (日本の 1/6)                                                         | 6.5km <sup>2</sup> (日本の 1/6)                                                          |
| 人口 | 130万人                                                                               | 196万人                                                                                | 285万人                                                                                 |
| 首都 | タリン                                                                                 | リガ                                                                                   | ヴィリニウス                                                                                |
| 言語 | エストニア語                                                                              | ラトヴィア語                                                                               | リトアニア語                                                                                |
| 民族 | エストニア人、ロシア人他                                                                        | ラトヴィア人、ロシア人他                                                                         | リトアニア人、ポーランド人、ロシア人他                                                                   |
| 宗教 | プロテスタント(ルター派)、ロシア正教他                                                                | プロテスタント(ルター派)、カトリック、ロシア正教他                                                           | 主にカトリック                                                                               |
| 国旗 |  |  |  |

注1:3国はそろって、2004年、NATO、EU に加盟

注2:北からバルト国の順番を覚えるコツ、アメリカのミステリー作家「エラリー・クイーン」を使う。

最初のエラリーは、エストニアのエ、ラトヴィアのラ、リトアニアのリ、最初の字が3国の頭の字

第5日目【7月22日(土)リトアニア・カウナス→ポーランド・ワルシャワ】●8,039 歩バス 6 時間 30 分

今日は、移動が長い一日。リトアニアとポーランドの国境を越え、ワルシャワを目指すバスの旅。







バスの長旅も、流れる雲を見上げ、通り過ぎる風景を見ていると、飽きない。サービスステーションで買い求めた**道路地図**で、ルートを追うのもバス旅の楽しみの一つだ。途中、国境をとる。今は使われていない施設ががらんとしている。

昼食で、美人の横顔のラベルに惹かれて**地ビール小瓶**を飲む。いつも二人で1本。妻はいつもは、最初の一飲みだけだが、美味しかったのか、多めに飲む。少しアルコール分が高く、コクがあり確かにうまい。

6 時間半の長旅で、やっとワルシャワ着。早速、歩いて**世界遺産**のワルシャワ市内観光。

丁度、土曜日とあって、地元や観光客で、人が溢れている。人出を見込んで、あちこちで楽器を演奏している。耳に心地よく、ここで半生を過ごし



たショパンの旋律がよく似合って気分が良い。学術と芸術の薫り漂うワルシャワは、第2次世界大戦中、2度に渡ってナチス・ドイツに破壊されたが、戦後見事に復元され、破壊の跡は微塵も感じさせない。





今年、生誕 150 年の「マリア・スクオ  
フスカ=キュリー」の生家である博物館  
を訪ねる。時間もなく中には入らず、冊  
子をもらい入り口に写真を撮って記念  
とした。ご存知のように、彼女は放射性  
元素ポロニウムとラジウムを発見。ノ  
ーベル物理学賞と化学賞とで2度受賞  
した。自転車は彼女が一番好きな乗り  
物と冊子に書いてあって、微笑ましい。



他にも「地動説」を唱  
えたコペルニクスの像  
もあって、ポーランド人  
の優秀さを感じた。

旧王宮広場から目抜



き通りのクラクフ郊外通りを、『国立オペラ  
劇場』、『大統領官邸』、『ワルシャワ大学』  
を見ながら歩く。途中、給水車が停まっ  
て、飲水を配っている。並んでカップ一杯  
の水で一息つく。建物のてっぺんに円形状のバルコニーがあり、人影が気にな  
ってズームで撮ると新婚のカップル。今日は土曜日、結婚式の多い日だ。



『聖十字架教会』では、中に入り、死後フランスからワルシャワに戻ったショパンの心臓が教会の柱に埋め  
られている。第2次世界大戦中にドイツ軍に破壊され心臓も持ち出されたが、戦後、教会が再建されると  
心臓も返還され同じ場所に戻った。ショパンのプレートが掲げられているところに心臓が安置されている。  
手向けられた赤いバラ(フラッシュがたけず赤く見えない)が印象的だった。

ワルシャワ泊

第6日目 【7月23日(日) ワルシャワ ⇄ クラクフ】 🌤️ 11,254 歩 鉄道 3 時間 23 分

今日は、鉄道で、クラクフに向かう。クラクフは 14~16 世紀にポーランド王国の首都だった。第2次世界  
大戦で、ナチスドイツに占領されたが、ドイツ軍の司令部があったためか、爆撃を免れた。ワルシャワが「東  
京」とすると、クラクフは「京都」と言われる。クラクフ歴史地区は世界遺産。





ユーレイルのインターシティか。座席指定の2等車。ここの案内だけ登場した女性が、飛び切りの美人。モデルのような。徳島から来たカメラの好きな男性が、しきりにポーズをとらせる。行き過ぎと感じたが、彼女はこぼまない。バルト3国では、金髪の小さな男の子の可愛らしさが目についが、ポーランドに入ると、スタイルの良い美人が多く、ついつい見とれて、妻から肘を突かれてしまった。

くじ引きで4号車の63番と64番が座席。向かい合わせの席は、**山室さんご夫妻**。その前から食事の時など、不思議にご一緒する機会が多かった。奥様が望遠付きの一眼レフを

かかえて、行く先々でカメラに収めていたので、『ソー



ル・ライター展』をご覧になりましたかと尋ねると、一瞬驚いた表情で、ご覧になったとのこと。デジカメ写真を持つ私からの思いがけない質問にびっくりされたようだ。ファッション関係の



仕事をなさっていて、写真は趣味で幾つかのコンテストに応募していることがわかった。話をしている、妻の目の前で私の感性を褒めて頂けて素直にうれしかった。ご主人はビデオを廻して役割分担が出来ている。ご夫婦で世界各地を周っていて、今度はアイスランドにオーロラを見にゆくという。ご主人はシルクロードが好きとのこと。いろいろな資料をコピーした手作りの分厚いノートを持参で、感服した。夫婦間の話を披露しあいながら、笑いの絶えない和気あいあいの鉄道旅だった。

＜ソール・ライター展＞6月に、東急文化村ミュージアムで開催。ニューヨークが生んだ伝説の写真家『ソール・ライター展』を観て衝撃を受けた。彼は、1950年代、第一線のファッション・カメラマンとして活躍していたが、一方で、ニューヨークに暮らす人々の何気ない日常を切り取った、色彩感覚を活かした作品を残している。



クラクフ駅について、バスでレストランへ。最初の訪問は、『クラクフ国立博物館』でレオナルド・ダ・ヴィンチ『白テンを抱く貴婦人』を観る。以前、横浜美術館に来た時に観ているので今回は2度目だ。照明を暗くした特別展示室で、押し合いへし合い







で観る。レプリカは撮影がOK。外に出ると観光馬車が何台も並んでいるのは、さすが観光地。

『中央市場広場』は、旧市街の中心にあって中世から残っている広場としてはヨーロッパ最大の広さ。中央に『織物会

館』があって、ここの1階は土産物店。広場で目立つのは、『聖マリア教会』。ゴシック様式で建てられたクラクフ初の教会。あいにく雨が降ってきて、自由時間は、**聖マリア教会**で雨宿りしたり、**織物会館**の土産物店を見たりして過ごした。**織物会館**から**聖マリア教会**の方向を眺めると、絵になる景色。スケッチの素材にと何枚も写真に納めた。

**織物会館**の角に立っている民族衣装の若者とは、何回も前を通るので顔なじみになってしまった。ホテルに向かう路に馬車が何台も通り過ぎる。今日は雨が降ったが、稼ぎはどうだったのか。

クラクフ泊(連泊①)

第7日目 【7月24日(月) クラクフ→ヴィエンチカ→オシフィエンチム→クラクフ】 27,196歩 バス  
 <ヴィエリチカ岩塩坑> 朝食の後、ヴィエリチカに向かう。**世界遺産**の“地底の美術館”『ヴィエリチカ岩

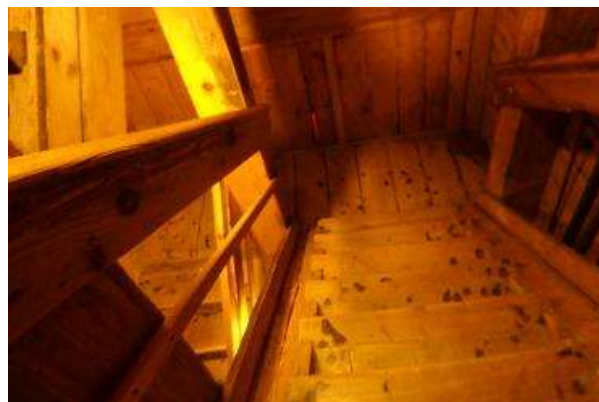


塩坑』の見学だ。町の地下に1250年頃から採掘されていた世界有数の規模の岩塩採掘場がある。18世紀から観光向けの公開が始められ、ゲーテやショパン、コペ

ルニクスも訪れたという。建物に着いて、エレベーターで



下に下り、途中から木の階段を黙々と下る。途中、ヴィエリチカの伝説や歴史を再現した像が置







いてある。一番奥に、『聖キング礼拝堂』がある。

完成まで70年を費やしたという。ビクトリア滝壁、床、シャンデリア、聖像、絵画など、全てが塩で作られた地下礼拝堂。ポーランド出身で国民に人気のある元ローマ法王ヨハネ・パウロ2世の像や名画「最後の晩餐」が印象に残った。



<アウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所> ナチス・ドイツが150万人ものユダヤ人を虐殺した「負の世界遺産」。最初の『アウシュビッツ強制収容所』は1940年に、オシフィエンチム郊外に建設された。最初は、ポーランド人の政治犯、次第にユダヤ人やロマ、ソ連軍捕虜も収容された。ここから約2kmのところから1941年から建設された第2アウシュビッツと呼ばれる『ビルケナウ強制収容所』は、規模も大きく、ユダヤ人絶滅のための場所となった。

鉄条網や監視塔はあるが、一見レンガ造りの立派



な建物が立ち並んでいる。しかし内部に入ると、収容



者の遺品等がこれでもかという程、陳列してあって当時の悲慘な有様がいやでも目に入って





くる。石の階段がすり減っていたのが訪れる人の多さを物語っていた。



最愛の妻や  
両親を別の収  
容所で亡くし、  
想像を絶する  
収容所体験を  
生き延びた、ウ  
ィーン生まれ  
の精神科医フ  
ランクル氏が、



つ。ドイツでは、こうした悲劇が二度と起こらぬよう、当地への訪問を教育に取り入れていると聞く。

移送されてきたユダヤ人を待つ、引込線のレール跡を見て帰途に着く。



第8日目 【7月25日(火) クラクフ→チェンストホーヴァ→ワルシャワ】 6,882 歩 バス  
【ヤスナ・グラ(光の丘)修道院】 チェンストホーヴァは、人口の88%がカトリック教徒というポーランド国民の精神的な首都とも言える。1655年のスウェーデン軍の侵略の際、チェンストホーヴァにある『ヤスナ・グラ修道院』は最後まで屈しなかった。

クラクフ泊(連泊②)



1382年に聖パウロ修道会のために建てられた僧院。スウェーデン軍の侵攻に耐えたのは、ここに安置された聖母『黒いマドンナ』のもたらした奇跡とされた。



これ以来、この画は困難からの守り神として崇められ、各地から、多くの巡礼者が訪れる。丁度ミサの最中で、小さな聖母画『黒いマドンナ』に多くの聖職者・信者達が敬虔な祈りを捧げていた。フラッシュなし



の写真撮影は許されているものの、シャッターを押すのを躊躇する程の強い信仰心に圧倒された。純朴な『黒いマドンナ』は、ロシアで見たイコン像を思い起こさせる。帰り際、ガイド役の修道女に、覚えた数少ないポーランド語で、「ジンクイエ」（ありがとう）と語りかけると、「にっこり」微笑が返ってきた。

昼食後、今度はバスでワルシャワに戻る。約 6 時間の行程だ。首都ワルシャワに着いて、夕食のレストランの前に広がる広場から、市内を遠望



する。食事を終え、最後の夜は貸切のショパンピアノコンサート鑑賞。60歳の著名男性ピアニストの指先を見ながら、ショパンのピアノ曲に耳を傾けながら旅の余韻を楽しむ。ワルシャワ泊





第9日目 【7月26日(水) ワルシャワ → フィンランド・ヘルシンキ】 7,909 歩空路1時間40分

今日は帰国日。昼食後、飛行場に向かう途中、市内の『ワジェンキ公園』に立ち寄れたのは幸運。この公園の夏の風物詩は、ショパン像の前で行われるショパンコンサート。バラなど花々の溢れた公園の緑の森を背景に、柳の木の下に座り故郷の自然を眺めるショパン。素晴らしい像だ。



ポーランドの行程を終え、ワルシャワの空港からフィンランド航空機で、ヘルシンキを目指す。1時間40分でフィンランド・ヘルシンキ着。ヘルシンキ乗り継ぎで、同じフィンランド航空で、成田行にトランジット。中国人の中学校の団体客が大勢で、パスポートコントロールが混雑し、離陸直前に滑り込んだ。ハラハラの乗り継ぎだった。



で、ヘルシンキを目指す。1時間40分でフィンランド・ヘルシンキ着。ヘルシンキ乗り継ぎで、同じフィンランド航空で、成田行にトランジット。中国人の中学校の団体客が大勢で、パスポートコントロールが混雑し、離陸直前に滑り込んだ。ハラハラの乗り継ぎだった。

|    | ポーランド                                                                               |
|----|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 面積 | 32.2 万km2 (日本の 4/5)                                                                 |
| 人口 | 3,800 万人                                                                            |
| 首都 | ワルシャワ                                                                               |
| 言語 | ポーランド語                                                                              |
| 民族 | ポーランド人                                                                              |
| 宗教 | カトリック                                                                               |
| 国旗 |  |

第10日目 【7月27日(木) ヘルシンキ → 成田】7,909 歩 空路9時間40分 バス1時間 鉄道30分 自転車10分

偏西風にのり、9時間40分で8:45成田着。到着の手続き後、バス、JR、駅から自転車で13時前に帰宅。

### バルト3国、ポーランドの旅を終えて

昨夏の南部アフリカ、一昨年夏のスイスの大自然の旅と比べると、エキサイティングな感動はないものの、訪れた国々の市井の人々の姿が、身近に感じられた旅だった。出会った人々は殆どが白人、有色人種は観光客以外、見かけなかった。街は綺麗でゴミは見当たらない。バルト3国に中世の街並みが残っているのには驚いた。ポーランドは、度々の戦火にもかかわらず、建物も修復し、共産主義から脱却するなど不屈の精神を感じた。



どこの国もシェア自転車が導入されているなど新しい取り組みにも挑戦しているのに感心。

ツアーは全員で25名。男性13名。女性12名。ツアーで男性が多かったのは初めて。夫婦が7組。男性の一人参加が6名もいたのも驚き。最高齢は77歳の一人参加の男性。

最後までご覧頂きありがとうございました。ページ数が多くなってしまいましたが、バルト3国とポーランド夏の旅をお楽しみ頂けましたでしょうか？

それではまた

2017年9月24日

井上 清彦